

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第3章 ヨシュアからサウル王までの時代⑤



ハンナ

ハンナ

デボラの祈りは、既に見たように、主を大いにあがめ、高くあがめる形を取るものであり、記念の歌として、ミリヤムのものと同じ流れに属するものでした。対照的に、ハンナの言葉は、祈りとしてもっと容易に認識できるものとなっています。事実、ある資料では、ハンナの祈りを「祈る女性が最初に記録された事例」だと記しています。もちろん、多くの敬虔な女性たちが、それよりも早い時代から既に祈りを捧げてきていたわけですが、ハンナの祈りが記録されているのは、他のいかなる理由にも優ってその結果のゆえだと言えるかもしれません。彼女の祈りは、イスラエルの預言者の中でも最も影響力の大きな人物であるサムエルを生み出すものとなりました。サムエルはそして、他に比類なきダビデ王の選びと油注ぎのために神から遣わされた者となったのです。

ハンナの心は痛んでいた。彼女は主に祈って、激しく泣いた。そして誓願を立てて言った。「万軍の主よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主におささげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。」…ハンナは心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。（Iサムエル記 1:10-11,13）

心の一番深いところでの願いというものは時として、神の目的に影響を及ぼしてしまうことがあります。一方には、子どもがなくて悲しんでいる女性ハンナ、もう一方には、イスラエルの歴史を永遠に変えてしまう預言者をまさに送ろうとなさっている主がおられるのです。両者を結びつけていたものこそ、言葉にならない祈りでした。

泣くことと祈ること、私と勝利とは、しばしば手に手を取って進んでいきます。祈る人々の中でも最も際立った方であるイエスを見ても、聖書は次のように語っています。「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました」（ヘブル 5:7）。涙は、魂の苦悩と切迫した様子を高らかに告げ知らせるものであり、両者は共に、憐れみに満ちた神からの応答を引き出すものとなるのです（II列王記 20:5）。

ハンナの祈りのうちには、懇願と約束とが混在し、「もしも…してくださるなら、私は…いたします」という、ほとんど聖なる駆け引きのようなものが見られます。これは単なる、安っぽい交換というわけではありませんでした。魂の切迫した状態が、深く願っている目標を得るべく喜んで犠牲にしようとするものによって、測られ

るのです。

ハンナの祈りに独特なものが、「くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった」(Iサムエル 1:13))というものです。彼女の目からは涙が流れていましたが、その祈りは心からあふれ出るものでした。これは、心の中の祈り、すなわち沈黙の祈りの例として記録されている最古のものです。そして、このような例のゆえに、祈りが聞かれるかどうかは、願いを捧げる人の声の大きさに左右されるものではないということがわかります。「隠れた所で見ておられる」(マタイ 6:6)神ですから、その関心を引くために叫ぶ必要などまったくないのです。神が求めておられるのはただ、その人の魂の切なる願いだけです(もちろん、切なる願いがあれば、自ずと大声で表現されるということもあり得ます(マルコ 10:46-47を参照))。ハンナは、声に出して祈ってはいませんでした。おそらくは心の中の重荷は正確に思い描いていたのでしょう。というのも、大祭司エリに対して、「私はつる憂いといらだちのため、今まで祈っていたのです」(Iサムエル 1:16)と語っているからです。

また、ハンナは祈りの答えを得てもいます(Iサムエル 1:17-18)。最初の答えは、エリから与えられた神のお言葉でした。「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように」(Iサムエル 1:17)。祈る人は、誰もがハンナの例から教訓を得ることでしょう。彼女は、答えが与えられたことを信じるのに、実感することのできる証拠を必要としてはいませんでした。彼女が必要としていたのはただ、主からのお言葉だけでした。「彼女の顔は、もはや以前のようではなかった」(Iサムエル 1:18)とある通りです。ハンナの信仰は、主のお言葉により頼むものだったのであり、結果、時が満ちてサムエルが生まれました。ハン



ナの信仰は、その時もはっきりとしたものでした。彼女が息子につけたのは「神の御名」という名前だったからです。彼女はこのようにして、自分の祈りを聞いて答えてくださった誠実な神の御名(そのご性格とご性質も含めて)をあがめたのです。この名前はまた、息子に敬虔な名前と性格を持つ者になって欲しいという彼女の願いを表すものでもありました。

祈りは必ずしも願いである必要はありません。ハンナの第二の祈りは、信じる主を最高にあがめる形で始まり、心をかき立てられての預言的な言葉で終わっています。

「私の心は主を誇り、私の角は主によって高く上がります。私の口は敵に向かって大きく開きます。私はあなたの救いを喜ぶからです。主のように聖なる方はありません。あなたに並ぶ者はないからです。私たちの神のような岩はありません。…まことに主は、すべてを知る神。そのみわざは確かです。…主は殺し、また生かし、よみに下し、また上げる。主は、貧しくし、また富ませ、低くし、また高くするのです。主は、弱い者をちりから起こし、貧しい人を、あくたから引き上げ、高貴な者とともに、すわらせ、彼らに栄光の位を継がせます。主は聖徒たちの足を守られます。悪者どもは、やみの中に滅びうせます。まことに人は、おのれの力によっては勝てません。主は、はむかう者を打ち砕き、その者に、天から雷鳴を響かせられます。主は地の果て果てまでさばき、ご自分の王に力を授け、主に油そそがれた者の角を高く上げられます。」(Iサムエル記 2:1-3,6-10)

イスラエルのこの敬虔な母は、静かな、声にならない願いから、おそらくは大声での言葉を尽くした讃美と、やがて来たるべきメシヤを指し示す預言的な宣言へと引き上げられるところとなりました。彼女の讃美はマリヤの讃歌(マニフィカト)を彷彿とさせるものとなっています(ルカ 1:46-55)。



質問

1. ひとりの女性の個人的な願いと、イスラエルの歴史に影響を与えようとする神の計画を結びつけたものは何でしたか？
2. ハンナが祈る姿とキリストの祈る姿に共通するものは何ですか？
あなたも同じように祈ったことがありますか？その祈りに神はどのように答えて下さいましたか？
3. ハンナの祈りは沈黙の祈りでした。その祈りに神は答えて下さいました。このことから神が求めておられるのはどのような祈りだと思いますか？
あなたも神が求めておられる祈りをしていますか？
4. ハンナは祈った時にエリをとおして最初の答えを受け取りました。それは何ですか？
その後、時が満ちて、ハンナはどのような祈りの答えを経験しましたか？
あなたは祈った時に、ハンナと同じように答えを受け取っていますか？
5. 記録されているハンナの2番目の祈り（サムエル記第一2章）は、最初の祈りとどのように結びついていますか？
あなたは切実な願い神にささげ、それがかなえられた時に神への賛美をささげていますか？
6. 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

主よ。あなたの前に切実な祈りをささげます。あきらめることなく、魂を注ぎ出して祈ります。聖霊が私の祈りを助けて下さるように。そして、私の祈りがあなたのご計画と結びつき、確かな答えにつながり、私があなただけを礼拝できますように。